

A・MUSEUM

vol.56
[2008.9.25]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



笠間市稲田の採石場



外壁に「稲田白御影石」が使われている茨城県庁舎

笠間の石材「稲田石」

笠間市稲田を中心とした東西8km、南北6kmにわたる一帯は、たくさんの石切場が連なり「石切山脈」とよばれています。ここで産出する石材は、石英・長石・黒雲母の3種の鉱物が結晶化してできた粗粒黒雲母花崗岩で「稲田白御影石（稲田石）」ともよばれています。

この石材の採石・加工業のはじまりは、江戸時代までさかのぼります。石材は、柔らかい白色で雨の日にはグレーに変化する色合いです。また、大変硬くて風化に強いので経年変化がほとんどみられません。そのため日本銀行本店や東京駅をはじめ、さまざまな建築物の内外壁や柱などに利用されてきました。

現在でも安定して供給できる国産の石材として、大型の建築にはよく稲田石が用いられ、茨城県庁舎にも多く使われています。また、石段や墓石など私たちの生活の中でも広く利用されています。（資料課 永瀬卓也）

第44回
企画展

ザ・ストーンワールド 人と石の自然史

石を使ったスポーツに、氷上で“ストーン”を滑らせ、ぶつかり合わせながら得点を競うカーリングがあります。みなさんもこのスポーツのように、身近な石を使って遊んだ記憶があるのではないでしょうか。

石は私たちの生活のさまざまなところで利用されています。ビルなどの大きな建築物の壁や床材として、門や石塀として、庭石や記念碑の素材として、硯や文鎮、アクセサリーとして、ときにはテーブルや食器として、その活躍の場は多岐にわたっています。石という素材には、「硬い」「重い」「長持ちする」「さまざまな色や質感をもつ」「耐水性・耐火性が高い」などの特性があります。これらはときには短所にもなりますが、その特性を理解して活かすことによって、石はすばらしい天然素材として利用できます。

茨城県は古くから「真壁石」「稲田白御影石」「羽黒青糠目石」（いずれも花崗岩類）などの採石業や石材加工業が盛んで、特に真壁は日本三大石材産地の一つにも



さまざまな色の大理石と石灰岩

数えられています。今回の企画展では、国内外のさまざまな石材の利用と茨城の石材にスポットを当てながら、世界の石の文化、石という素材の多様性や特性、石と人とのかかわり、石に含まれている地球の記憶、動物や植物の石の利用などをとおして、石という素材の魅力を紹介します。（資料課 小池 渉）



石が主役のカーリング



孔雀石製の皿



稲田白御影石の採石（笠間市稲田）



家屋新築の謝礼として大工に届けられる石貨（ヤップ島）
提供：須藤健一



石でダチョウの卵を割るエジプトハゲワシ
提供：千葉市動物公園 / (財)千葉市動物公園協会



岩石の中にある液体の球。この中から日本ではじめてダイヤモンドが発見された。
提供：水上知行

会 期 2008年10月11日(土)～2009年1月12日(月)
10月11日は午後1時からの公開となります。
開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)
休 館 日 毎週月曜日、年末年始(12月28日～1月1日)
ただし、10月13日・11月24日は開館し、翌日が休館となります。
11月3日は開館し、振替休館はありません。

大人&子どもフィールドガイド「石のふるさと・笠間」

大 人コース(中学生以上): 花崗岩の採石場見学
子 どもコース(小学生のみ): 笠間の粘土で焼きものづくり
日 時: 2008年10月26日(日) 10:00～14:30

場 所: 笠間工芸の丘(現地集合) 定員: 各コース30名(抽選)
参加費: 保険料1人につき50円

自然講座「石ころアートを描こう」

日 時: 2008年11月22日(土) 13:30～15:30
対 象: 小学4年生以上 定員: 30名(抽選)
講 師: 片岡朱央氏(手描き友禅染模様師, 自然彩色意匠)

ミュージアムコンサート「サヌカイト・コンサート」

日 時: 2008年12月7日(日) 17:30～19:00
対 象: 小学生以上 定員: 100名(先着順)
出 演: 安江佐和子氏, ニツ木千由紀氏(打楽器奏者)

オリジナルのミニ博物館を目指して ～スクールミュージアム活動紹介2～

スクールミュージアム事業では、学校独自の特色ある「ミニ博物館づくり」を推進しています。学校や周辺地域で採集した動植物や化石などの標本がスクールミュージアムに加わることで、地域全体の自然環境が明らかになっていきます。そのため、博物館の学芸員が学校に出かけ標本作製のレクチャーをしたり、夏休みに標本作製講座を実施したりしています。私たちは、子どもたちが身近な自然と接する機会が増え、地域の自然を調べる機運が広がってほしいと願っています。



夏休みの昆虫標本作製講座のようす

行方市立麻生小学校

麻生小学校は、霞ヶ浦の東岸に位置する、豊かな自然に恵まれた学校です。昨年スクールミュージアムが開設されたばかりですが、すでに子どもたちの手でつくられた植物標本が加えられています。当館学芸員が出前授業に出かけ、標本とはどんなものか、標本をつくる意義そして植物採集のしかたをレクチャーし、実際に校庭の植物を採集しました。約半月後、今度は子どもたちが博物館を訪れ、学芸員の支援のもと、乾燥させておいた各自の植物を台紙に貼り、ラベルをつけて標本を完成させました。一生懸命標本をつくる子どもたちの真剣さが印象的でした。



植物標本をつくる麻生小学校の児童

筑西市立関城西小学校

関城西小学校は、茨城県西部の丘陵地帯に位置し、雑木林や果樹園などが多い地域にあります。スクールミュージアムが開設されて4年目ですが、生きものが大好きな子どもたちが多く、昆虫や植物の採集、標本づくりにも積極的です。夏休みに博物館で実施している標本作製講座には、毎年たくさんの参加者があり、楽しみながら昆虫や植物の標本づくりを学習しています。これまでに、300点を超える標本がスクールミュージアムに展示され、身近な自然を学習するスペースになっています。
(教育課 伊藤 誠)



スクールミュージアムで学習する関城西小学校の子どもたち

トキが空に舞う

今年の9月25日トキが佐渡の大空に放たれます。

トキは江戸時代までほぼ全国的に生息していましたが、明治以降、急速に減少の一途を辿り、平成15年に日本産のトキは絶滅しました。一方、平成11年に中国より贈られたトキのつがい人工飼育により順調に数を増やし、現在、佐渡トキ保護センターなどで120羽を超えるトキが飼育されています。環境省では平成15年に「環境再生ビジョン」を策定し、

平成27年頃までに小佐渡東部に60羽のトキを定着させるという目標を掲げ今後も毎年継続し放鳥する予定です。

トキの野生復帰は、一旦自然の中から消えた野生生物を本来の生息地に再導入するという「種の保存」や「生物多様性の保全」を象徴する試みです。これからも困難があるかと思いますが、まずは島民の方々が長年待ち望んだ「トキが佐渡の空を舞う日」の実現をお祝い申し上げます。

コラム by director SUGAYA



イラスト：福本陽子（ミュージアムコンパニオン）

南相馬市より産した中生代植物化石に関する研究 ~共同研究報告~

今回の共同研究は、2005年に福島県南相馬市で採集した中生代ジュラ紀の植物化石を対象としたものです。これらの化石は常磐自動車道に関連する工事の際に、工事関係者の協力を得て採集したものです。採集にあたっては地元の相馬中村層群研究会の皆さんをはじめ多くの方々にお世話になりました。研究は、私の大学時代の先輩でもある(財)自然史科学研究所主任研究員の大花民子博士と一緒に行いました。

博物館における資料は、採集してきて収蔵庫に保管しておくだけでは意味がありません。資料をもとに研究して、資料の付加価値を高める必要があります。資料の産地、採集日、採集者などの基本情報はもちろん、その資料がどのような種類なのかを判断すること(同定)が重要です。今回の資料の場合、まず1,000点近い資料の一つひとつに番号を付け、写真を撮りました。そしてコンピューターのデータベースに番号と採集者などの基本情報を入力していきます。次に分類ごとに分けて棚の中に納めていきます。ここまでくると、データベースを見ながら、気になる標本を棚から簡単に選び出すことができます。最終的には一つひとつの標本を同定していくわけですが、これまでに同じ地層から報告されている種類については、すぐに判断がつく

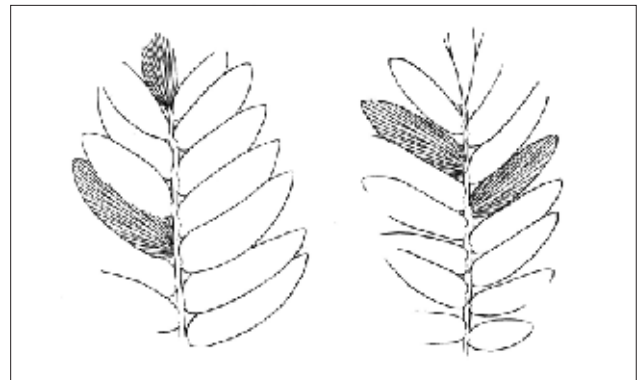
ので時間はさほどかかりません。しかし、新種と思われる資料については、すでに報告されているかどうか世界中の同時代の報告例を文献から探さなくてはなりません。そのため、研究者にとっては豊富な文献資料と世界中の研究者との情報交換が重要なのです。

研究をまとめるにあたって、報告書という形で印刷物を刊行しました。この報告書の中には、今回採集することができた植物化石について分類群ごとに主なものを記載しました(特徴を文章で表現すること)。このうち、新種と思われるものは、球果類で1、ソテツ類で3、ベネチテス類(写真解説参照)で2、シダ類で2という状況です。あわせて化石を産した地層に関する情報、標本の写真とスケッチ、化石のリストなども掲載しました。さらに、中生代の植物に関する基礎知識と記載文を読む際に有用と思われる用語の解説なども加えました。この報告書が、中生代の植物を調べようとする方々の役に立ってくれることを期待しています。

なお、今回の研究の内容について、先日(8/30-9/5)ドイツのボンで開催された国際古植物学会で発表しました。今後、新種の植物などを中心とした重要な標本について、学会誌に発表することにより、その標本は貴重なものとなっていきます。(教育課 滝本秀夫)



ベネチテス類の新種
このなかまは中生代末に絶滅。恐竜たちが好んで食べたと考えられている。



写真の標本のスケッチ
スケッチにより、写真ではわからない細部のつくりを伝えることができる。

落ち葉の下の力もち

秋の恵みの一つにキノコがあります。キノコは一年中みられますが9月から11月が最盛期です。キノコの形や色は千差万別で、その種類は数千種と考えられているそうです。

キノコはそのたらしきにより、木や落ち葉を腐らせる(分解)植物と栄養を補いあう(共生)植物や動物にとりつく(寄生)の大きく3つのなかまに分けられます。自然界にキノコが存在するからこそ、木や落ち葉は土にかえり、森は生き続

けることができるのです。生態系の物質循環においてキノコはなくてはならないものといえるでしょう。

ところで、皆さんは第3展示室の森のジオラマにキノコの模型が15種も隠れているをご存じですか?

また、野外施設には数え切れないほどの種類のキノコが確認されています。採集はできませんが、この秋はぜひ博物館へ“キノコ探し”にいらしてはいかがでしょうか?

(ミュージアムコンパニオン 張替優子)

小さな発見 - ミュージアムコンパニオン -



イラスト: 大原京子

茨城の淡水コケムシ

茨城の淡水コケムシ

コケムシは小さな動物体（個虫）が集まって群体をつくり、水中で固着生活をする動物です。これまでに、約4,000の現生種が報告されていて、そのうち50種以上が淡水に生息しています。種名まで分かっている種は、これまでに国内では17種、茨城県内では14種が確認されています。

茨城県内でこれまで確認されている淡水コケムシ

Phylum Bryozoa コケムシ動物門	
Class Phylactolaemata 被喉綱	
* 1. <i>Fredericella sultana</i>	
† 2. <i>Plumatella fruticosa</i>	ナガハネコケムシ
† 3. <i>Plumatella vorstmani</i>	スカシハネコケムシ
*† 4. <i>Plumatella emarginata</i>	ヤハズハネコケムシ
*† 5. <i>Plumatella casmiana</i>	カスミハネコケムシ
*† 6. <i>Plumatella repens</i>	ハネコケムシ
*† 7. <i>Plumatella rugosa</i>	
*† 8. <i>Hyalinella minuta</i>	
*† 9. <i>Hyalinella punctata</i>	
*† 10. <i>Stephanella hina</i>	ヒナコケムシ
*† 11. <i>Lophopodella carteri</i>	ヒメテンコケムシ
*† 12. <i>Asajirella gelatinosa</i>	カンテンコケムシ
*† 13. <i>Pectinatella magnifica</i>	オオマリコケムシ
Class Gymnolaemata 裸喉綱	
* 14. <i>Paludicella articulata</i>	チャミドロコケムシ

* 群体塊が得られている種, † 休芽が得られている種
リストにあげられているのは種まで同定された淡水コケムシ。

外来種オオマリコケムシ

日本産の淡水コケムシのなかでもっともよく知られているのは北アメリカ原産の外来種、オオマリコケムシでしょう。オオマリコケムシは、他の多くの淡水コケムシと同様、有性生殖によって増えるほか、休芽とよばれる植物のタネのようなものをつくって増えることができます。とくにこの種の休芽は、殻の周囲にいかり状の棘を有しているため、物に付着しやすく、鳥や人による移動を可能にしています。茨城県内では、これまで67か所の水域のうち、群体塊が19か所、休芽のみが10か所と広い範囲で確認されています。

他の淡水コケムシと比較し、オオマリコケムシは繁殖力が旺盛で、富栄養化した水域でしばしば大量発生

することがありますが、大量発生と水質や水温との関連はまだはっきり分かっていません。今後、データを蓄積し、オオマリコケムシが好む環境が明らかになれば、防除などにも役立つかもしれません。

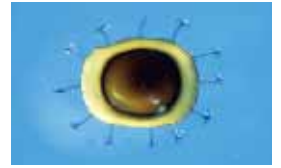
(資料課 池澤広美)



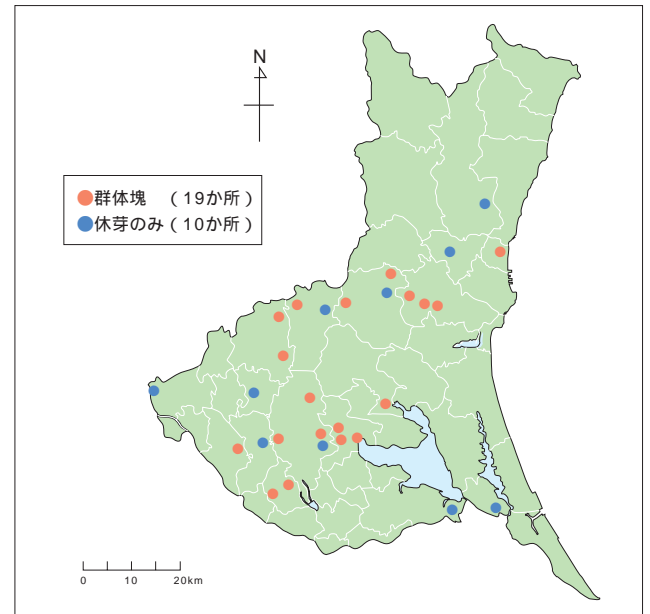
オオマリコケムシの群体塊



オオマリコケムシの個虫
(撮影: 廣瀬雅人氏)



オオマリコケムシの休芽
(直径約1mm)



茨城県内のオオマリコケムシの分布

日本産なのに外来種？

外来種と聞くと、外国から来た生物と思われる人が多いと思いますが、それだけではありません。本来生息していなかった地域に運ばれた国内の生物も含まれており、「国外外来種」・「国内外来種」と分けることもあります。

国外外来種はオオクチバスやブルーギルなどが有名ですが、国内外来種と聞いて思い浮かぶものは少ないと思います。当館で飼育しているカワムツはこれにあたります。本種の

分布は中部地方以西の本州、四国、九州の河川や湖沼で、本来茨城県には生息していませんでした。しかし、今や県内各地で見られるようになりました。その原因の一つとして、琵琶湖産のアユ稚魚の放流の際に、混入したことが考えられています。

近年、国外外来種が日本の生態系を脅かす恐れがあると騒がれていますが、国内外来種も少なからず生態系に影響を与えるはずで、私たちがひとりひとりが、むやみな放流を避

けることにより、生態系の保全に繋が

るのではないのでしょうか。
(水系担当 石坂泰敏)



カワムツ

中庭正人コレクション(海藻類標本)が寄贈されました

茨城県は海に面しており、沿岸の磯や砂浜にはさまざまな海藻がみられます。そんな茨城の海で40年以上にわたり、海藻の調査を続けている中庭正人氏より、昨年と今年、海藻類と海草類の標本を寄贈していただきました。また、中庭氏には、海藻類分野の調査員として、当館の第1～4次までの12年間の総合調査研究においてもご尽力をいただいています。

寄贈された標本は、1961～2008年の47年間にわたって中庭氏が主に茨城県内の海岸（一部は福島県いわき市勿来^{なごそ}の海岸）で採集したもので、海藻類のさく葉標本650点、海草類のさく葉標本38点で構成されています。

海藻類の標本数の内訳は緑藻^{りょくそう}59点、褐藻^{かつそう}173点、紅藻^{こうそう}418点で、種数では総計39科109種にのぼります。このなかには、ホソメコンブやアカバギンナンソウなど、中庭氏の調査記録が茨城県内初記録となった種も含まれていて、茨城県内における海藻類の分布を知ろうと学術的にもたいへん貴重なものです。

当館では、寄贈された標本を「中庭正人コレクション」として平成19年にトピックス展示で紹介しました。今後は、これからの研究、調査等において役立てていきたいと考えています。（教育課 亀山浩二）



中庭正人コレクション標本



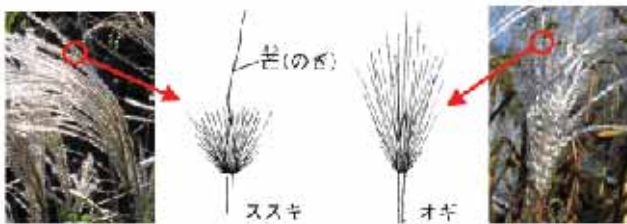
中庭氏の調査のようす

お月見にススキを飾りましたか？

今年は9月14日(日)が中秋の名月でしたが、みなさんはススキをお供えしたでしょうか。ススキの穂の向う側に見えるまん丸のお月さまは、一段ときれいだったことでしょう。ところで、ススキと間違えてオギをお供えしてしまった方はいませんか。ススキもオギもイネ科の多年草^{かせんじき}ですが、ススキは荒地などの乾いたところに、オギは河川敷などの湿ったところに生えます。ススキは漢字で芒と書きますが、この字は「ぼう」または「のぎ」とも読み、イネ科植物の花にあるとげを意味します。穂をつくっている小さい花に芒があるのがススキ、ないのがオギです（右図）。この点に注意すれば、ススキとオギを見分けることができます。

ススキは秋の七草^{おばな}では尾花^{おひな}とよばれています。「秋の野に咲きたる花を指折^{あよびあ}りかき数うれば七種^{ななくさ}の花 萩の花 尾花 葛花 撫子^{なでしこ}の花 女郎花 また 藤袴 朝顔の花」（山上憶良、万葉集）と詠まれているように、ススキは古くから日本人の心をとらえてきました。また、ススキは今ほとんど見かけなくなった茅葺^{かやぶき}屋根の材料としても利用されてきました。茅葺の家が多かったところは、地域の一角に茅場^{かやば}とよばれるススキが生えた草原がありました。今も地名として残っているところがあります。現在のキキョウ

暮らしの変化とともに生活から離れてしまったススキですが、秋の一日、銀色の穂が秋風にそよぐ姿を探してみたいはいかがでしょうか。（資料課 小松崎茂）



ススキとオギの花の比較



ススキ

(撮影：須田直之)

トピックス

海藻おしば作品コンクール

8月1日(金)～31日(日)に、海藻おしば作品コンクールを開催しました。6月のサンデーサイエンス「海藻のおしばをつくらう」に参加された皆さんの作品203点を第1展示室付近の通路に展示したものです。海藻おしばは、水につけた台紙の上に海藻を広げ、その後十分に乾燥させてつくります。海藻のもつ多彩な色や形をうまく生かし、鮮やかで素敵な作品が多くつくられました。また、皆さんの創造力の豊かさに感心させられた作品もありました。

これらの作品から、コンクールではファミリーの部(幼児と保護者が一緒になって制作)、小中学生の部、一般の部において、館長賞・金賞・銀賞・銅賞の合計12点の入選作品を選出しました。入賞された皆さんには、コンクール最終日の8月31日(日)にご来館いただき、当館の菅谷博館長より表彰状と記念品が贈呈されました。

たくさんのおしばの力作をご覧いただきながら、海面下のカラフルな海藻に少しでも興味を持っていただけでしょうか。今後も、楽しく有意義な体験のできるサンデーサイエンスや作品コンクールを企画していきます。どうぞお楽しみに。(教育課 湯原 徹)



海藻おしば作品展示の様子

化石のクリーニング3万人達成!

当館ボランティアが中心となって平成8年3月にはじまった化石のクリーニングも、平成20年8月7日に3万人目の参加者を迎えることができました。記念すべき3万人目の参加者は、埼玉県からご家族でご来館いただいた白川玲奈さん(小学校4年生)でした。

3万人達成にあたり記念式典が行われ、玲奈さんには当館の菅谷博館長から特別記念品としてバラの封入標本や恐竜タオルなどの博物館グッズが贈られました。記念品を受け取った玲奈さんは「はじめて博物館に来て、はじめて参加する化石のクリーニングでちょうど3万人目と聞いてびっくりした。」と驚きながらもうれしそうでした。また、この日の化石のクリーニング参加者の方にも、記念品として当館ボランティアが作っ

たブナの葉の化石のしおりが贈られました。

化石のクリーニングは当館ボランティアを中心として毎週木曜日に行っているイベントです。木の葉の化石が入った岩石から金づちとノミを使って化石を取り出していきます。皆さんも岩石の中から本物の化石を見つけてみませんか。(企画課 尾花義幸)



3万人達成記念式典での記念撮影

さまざまなチョウを展示しました!

茨城県で記録のある全120種のチョウのほか、コレクターの丸山氏や若宮氏から寄贈された希少なチョウなど、250種・500点のチョウの標本を展示した「茨城のチョウ・日本のチョウ・世界のチョウ」展を当館野外施設の自然発見工房において開催しました。

夏休みに合わせて開催したこともあり、多くの子どもたちで賑わいました。光沢性に光るモルフォチョウや鳥のように大きなトリバネアゲハの標本を見て、思わず歓声を上げる子どもたちが印象的でした。スケッチコーナーでは、気に入ったチョウを観察し何匹もスケッチしていた子どももいました。

また、大人の方にも楽しんでいただけたかと思えます。熱心に写真を撮る方、チョウの名前をメモしている方、世界の珍しいチョウに見入っている方など、お客様それぞれの方法で楽しんでいただけたようでした。

当館では、これからも皆様楽しんでいただける展示を行っていきたいと思います。ご来館をお待ちしています。(企画課 尾花義幸)



「茨城のチョウ・日本のチョウ・世界のチョウ」の展示の様子

上野動物園のクマを満喫！



ホッキョクグマのガイドを聞きながら見学する参加者

第43回企画展「熊 森のアンブレラ種」の記念イベントとして、観察会「動物園のクマ舎を探検 上野動物園スペシャルガイドツアー」を7月30日に開催しました。上野動物園に飼育されているクマの生活や飼育に関する最新の研究を紹介するイベントです。前半は、小宮輝之園長に『上野動物園のクマ飼育史』と題して、同園のクマ飼育の歴史をわかりやすく解説していただきました。参加者の方々からは、「園長先生のお話は、今まで知らなかった上野動物園のクマに関する話が聞けて楽しかったです。」「上野動物園の代表の動物がクマであることを園長先生の話聞いてはじめて知りました。」などの感想がよせられました。

後半は、クマの飼育担当職員によるクマ舎見学ガイドツアーです。ホッキョクグマ、ヒグマ、ツキノワグマ、マレーグマ、ツキノワグマ冬眠ブースの5つの飼育スペースのガイドツアーを行いました。参加者の方々

からは、「普段は入れない寝る場所や冬眠の場所が見ることができて良かったです。特に冬眠の部屋はすごかったです。」「直接飼育係の方のお話を聞くと、自分も動物への思いが温かいものに变化していくような気がしました。」「飼育係の方のクマたちへの愛情が感じられました。今回は本当に学ぶことが多いツアーで、参加できてよかったです。」などの感想がよせられました。ツアー中の参加者の方々の楽しそうなようすに、このツアーを実施できた喜びを感じました。参加者の方々には、クマを満喫し、クマの魅力を再発見していただけたことでしょう。（資料課 湯本勝洋）

編集後記

今号で第44回企画展「ザ・ストーンワールド」を紹介しています。そこに、家屋新築の謝礼として大工に届けられる石の貨幣の写真がありますが、驚くことにこの貨幣の石は、ヤップ島から400km以上離れたパラオ諸島で切り出され、カヌーで運びこまれました。そして、その道中での苦勞の大きさが貨幣の価値を高めたそうです。10月11日から開催される第44回企画展が楽しみです。(Y.O.)

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※10月13日(月)・11月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。
※11月3日(月)は開館し、振替休館はありません。
※12月28日(日)～1月1日(木)は、休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課 / 発行2008年9月25日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。